

# 「帯江研」だより

## からみ 鍔の風景を歩く

### 下道基行

私は、岡山の海沿いの集落で生まれ育った。幼い頃、家族で何度か犬島（帯江鉦山の旧製錬所）に遊びに行った。役目を終えて朽ち果てた巨大な製錬所の廃墟が脳裏に焼き付いている。今では美術作家として、国内外を旅しながら写真や動画で作品制作し展示や書籍で発表を続ける日々を送っていたが、2019年より直島で地域の歴史や風土などを新しく発掘し再活用しアーカイブする《瀬戸内「 」資料館》というプロジェクトを始めたことをきっかけに、翌年岡山の実家に程近いこの直島に家族と移住した。

移住して間も無く、島の外壁や階段などに部分的に使用されていた黒い煉瓦“鍔”の存在に興味を持ち、調べていくうちのそれが犬島のそれと同じ素材であることを知った。犬島では廃墟の中に残されていた鍔が、直島では日常の中で使われながら残っていた。早速、島民2人と共に日常的に鍔の風景を撮影し、インターネット上に共有のアーカイブを作った。（直島鍔風景研究室 <https://www.instagram.com/naoshimakarami/>）鍔は島の北部にある三菱の直島製錬所で作られ、その造形物は基本的に元三菱の社宅があった土台や塀などに残されることが多い。ただし日本全国で見かける煉瓦やブロックだけではなく直島独自の屋根瓦やタイルなどバリエーションが豊富であることが徐々に分かった。地元に住む三菱のOBたちに話を聞いてまわると、島の鍔の造形物は製錬所で排出された鉦滓を型に流し込み、1950年代に約10年のみ製造されていたという。私たちは1年間ほどの調査の結果を《直島「鍔」風景地図》として地図の形にまとめた。”アートの島”として観光客が絶えない島のもう一つの顔、銅製錬という主要産業が生み出した島独自の風景に観光客が触れられるアイテムとして、島内のショップなどで販売を開始した。帯江鉦山からの鉦石を製錬していた犬島の鍔煉瓦の廃墟は2013年に現代美術家と建築家によって犬島精錬所美術館として大々的に生まれ変わり世界的に注目を集めている。逆に、直島の鍔の風景は日常生活の片隅で細々と使われながら残っているので、この《直島「鍔」風景地図》を



宮浦集落で使われている鍔煉瓦(写真:下道基行)

手に宝探しのように歩き回るのも悪くないのではないかと考えた。

銅を製錬すると出てしまう厄介者の直島の鉦滓“鍔”は、戦後に三菱の社宅の土台や塀や瓦などに転用され、最近ではカフェの玄関やゲストハウスの階段



直島「鍔」風景地図(写真:宮脇慎太郎)

などにアクセントとして使われ、“お洒落”な存在として若い移住者の中で密かに注目を集めている。もちろん、販売などはされていないので、ご近所の関係性の中でのみ取引されているようで、先日も壊された小屋の屋根の鍔の瓦を私が譲り受けた。鉦滓はリサイクルの先に骨董的な価値観を帯び始めた、それは直島独自の現象かもしれない。

### 下道基行(しもみち もとゆき) 写真家・美術家

1978年岡山生まれ。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。日本各地に残る戦争遺構を調査撮影したシリーズ『戦争のかたち』(2001-2005)、自らの祖父の遺した絵画を追って旅したシリーズ『日曜画家』(2006-2010)や、日本の国境線の外側を旅し日本植民地時代の遺構の現状を調査するシリーズ『torii』(2006-2012)など。フィールドワークをベースに、生活のなかに埋没して忘却されかけている物語や日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで視覚化する。2019年ヴェネチアビエンナーレ日本館参加アーティストであり、国内外で展覧会や出版の活動を続ける。2012年光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞。2020年第21回岡山芸術文化賞グランプリ

### 帯江鉦山研究会 規約

- 第1条 (名称)  
本会は、帯江鉦山研究会(略称・帯江研)と称する。
  - 第2条 (所在地)  
本会の所在地は、総社市門田213 小西伸彦宅に置く。
  - 第3条 (目的)  
本会は、帯江鉦山とその関連施設、関係する人物等の歴史や遺構の調査・研究を進め、その成果を地域社会へ還元することを目的とする。併せて、会員相互の交流の場とする。
  - 第4条 (活動内容)  
本会は、前条の目的を達成するために以下の活動を行う。  
・年2回、会員による調査成果の例会報告会を開催する  
・地域社会へ還元する場として、講演会や遺跡探訪などを実施する  
・資料館や研究グループ等への情報提供や情報交流を行う  
・その他、本会の目的を達成するために必要な事業を行う
  - 第5条 (会員)  
本会の目的に賛同した有志であることを入会の条件とする。
  - 第6条 (役員)  
本会には、次の役員を置く。  
代表 1名  
事務局担当 1名  
監査役 1名
  - 第7条 (役員を選出)  
本会の役員は、会員の互選により選出する。
  - 第8条 (役員任期)  
役員任期は、9月13日から翌年9月12日までとし、再任を妨げない。
  - 第9条 (会費)  
会費は年間1千円とし、これを財源として本会の運営費用に充てる。また、企業や文化財団等に文化活動助成金の支援を仰ぐ。
  - 第10条 (規約改正)  
この規約は、会員の過半数の同意をもって改正することができる。
  - 第11条 (設立年月日)  
本会の設立年月日は令和2年9月13日とする。
- 附則  
この規約は、令和2年9月13日から施行する。  
令和3年5月31日に改定  
令和4年11月27日に改定

# 蝸堂隨筆

帯江鉦山研究会会員 近藤修六

## 永遠の別れ

我が家に『蝸堂隨筆』といふ手記がある。書いたのは私の曾祖父・近藤鎌之介で晩年したためたもの。

鎌之介は慶応2年(1867)、備前邑久郡美和村に生まれ、閑谷學で西微山先生に師事し、明治20年(1887)地元の小学校教員に赴任し、明治26年(1893)岡山日報社へ入社。その2年後明治28年(1895)、坂本金弥の要請を受け帯江鉦山に転職し経理を担当しました。10年間勤め上げ、明治37年(1904)7月、米国探国事情のため妻・杣と義弟・彦太郎を伴ってアメリカのサンフランシスコに渡りました。当地で日本人会会長橋本氏と一緒に幹事などを務め活躍しましたが、大正2年(1913)に病に罹り帰国し、2年後の大正4年(1915)6月、現在私が住む中帯江の自宅で亡くなりました。50歳でした。

その『蝸堂隨筆』の中の一文に釘付けになりましたので、原文のまま以下に紹介します。

### 琴糸女子の事

琴糸女子は余が妻にして備中国都窪郡なる豊洲村中帯江に林氏の長女なり。

名は杣子、琴糸は其雅号なり。同地に有名な古刹あり景光山観音寺と云う世俗称して不洗観音寺と云う寺は、法印増慶なるもの俗縁の実弟林景光と共に協力し大和国城上郡伯瀬山寺(長谷寺)の十一面観音像の余材を以って尊像を作り勸清して等地に精舎を建て安置せり、時正に聖武天皇天平五年以降数年後の事なりしと云う。林氏は実に其後裔なり。琴糸の父萬(万五郎)、景光と号するもの亦之に因めるなり。

琴糸天性闊達にして英敏殆ど男子を凌駕する概あり。また縫裁手芸に長じ凡そ婦人の技芸として通せざるものなし。不幸に子なし。即其季弟寛(寛三郎)を迎えて余が先妻の子賤子に配し以って近藤氏の家名を継承せしむ。琴糸又俳句を嗜む。かつて父の古希と母の還暦を迎えるの春句あり。

二もとの松を柱や花の幕 老松を真ん中にして花むしる

明治三十七年一月余が立机式をあげる時にあたり

良人一旗を今壇に樹つるを喜びて

と題して左の一句をものにして同人に示せり。

誉められた梅に解きけり歌袋

琴糸又貞淑能良人につかえ内助の功甚だ多とす。殊に余が酒を嗜み、且つ壮来素行修らざりしが為め、彼れは一層の苦節を守りしなり。

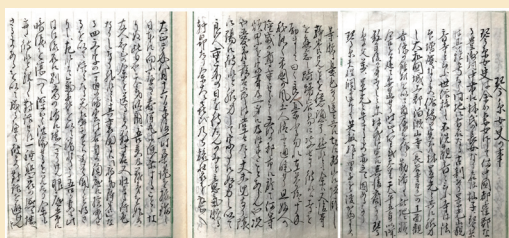
明治三十七年六月余と共にアメリカ合衆国に航するや、彼はその男性的気性を發揮し、良人と共に夙夜奮闘せり。且つ其の進取的性格はよく学ばずして英語を習得し日常商事その他に関し、白人と応対交渉するにあたり流暢なる、英語会話は豪も事物の渋滞をきたざりき。

故をもってミセス近藤の名は附近及び商事に係る白人間に知られざるは無かりしなり。彼の万氣横溢の結果というべし。

大正二年夏余に病あり。吾が妻及び義弟(林彦)等頗る憂色あり。医と共に切に故山に帰路し静養せんことを懇懇す。しかれども余は又後事を懸念し躊躇容易に決せず。彼に声を励まして曰く良人憂うる勿れ。在米茲に十年我能く米国の風土・人情に通曉せり。且婦人の権威の尊重せらるる文明の都市に於いて何等煩累を家事及び一身に及ぼすことあらんや。況や愛



蝸堂隨筆



蝸堂隨筆の一文

弟彦太郎は堂々たる丈夫児なり。陰に陽に彼と協力して家事に努力し以って良人重來の日を待たんのみと意氣頗る軒昂なり。余大いによるこび旅装を整え、大正二年八月十六日午後一時、桑港を抜錨し 春陽丸



日本に向かうべき春陽丸に便乗する事となりぬ。此日や天気晴朗、我妻及び義弟を始め友人知己の余を送るもの数十名。又壮なる行色なりし。我とも其の裏面には「病氣静養」なる四文字の一通の暗雲は各自の胸底に揺曳せるを以って、嬉々たる笑聲などは多く聞くを得ざりし。されど気性を以って勝たれる吾が妻も此日は流石に別離の情に堪えざりけむ。眼底常に暗涙を堪えつつ余も亦、彼と親しく対話せば一種懇哀の感に堪えざるものあるを以って、成るべく彼との対話を避けんとせり。斯の如くにして見送りの人々等と別杯を上げ各甲板に上がり。時正に抜錨の機迫れりるを以って、友人等各別れを告げ再会を期して去れ利。妻と義弟も止む事無く愁勝として徐に舷を下れり。刻一刻山の如き巨船春陽丸は錨を抜き徐々として進行の微動を始めたり。この時余は甲板上より多くの同船者と共に埠頭を俯瞰し妻と義弟及友人等に注目せり。彼等も亦他の多くの見送り人等と共に甲板上を仰視し特に妻と義弟は余を見失はざらばんことに力めたり。

斯の如くにして、尽きぬ尽きぬ名残りを惜しみつつ双方視線の合致するや一声、声高くグッドバイの声は起これり。余も亦之に応じ帽子を振ってグッドバイを叫びたり。而して衷心密かに謂へらく、是吾が妻及義弟友人等との生別にして又恐らくは永久の袂別ならんかと覚え、潜然として熱涙溢泥として下れり。妻も亦余と感を同ふせしにや、流涙虚稀して面を上ぐる能はず。義弟も憮然として頭を垂れ居たるを認めたり。嗚呼此一刹那の悲劇的光景は余が終生に忘れる能はざるべし。憐なる我妻よ義弟よ。回顧すれば余は彼等と相見ざること茲に一か年、而かも金門湾頭に於ける別離の惨況、其の声、其の面容、服装は素より妻が飲泣して語る能はざりし有様まで、今尚幻の如く余が眼前に彷彿たるを覚ゆるなり。

大正2年9月1日、横浜に帰着するや先ず妻の家及び二三の縁者の家へ打電し、直ちに東京北里博士の養生園に入り静養する事、殆ど4ヶ月。同年12月29日無事備中林邸に帰しが、岳父景光翁及び老母が懇切の同情と余等外遊十カ年の間、同家にて養育成長せしめられし長女静子及び婿寛等が深刻なる孝養の下に心静かに保養することなれり。

爾來余が妻と義弟は余が嗜好せし洋食料品及び日常調度品の送付等至らざる處なし。特に養生費(余が要求せざるに拘わらず)としての金員を送付し來ること数次にして其の額甚だ多しとす。余は之を受ける毎に感謝の涙を禁ずるに能はざりき。而かも彼等は極めて深甚痛切なる同情即ち其の貞節と貞悌の情を以て余が病状を救はんことに焦慮苦心しつつあるなり。天は何故速やく彼等の赤誠を納受まりして、余をして健康旧の如くならしめ玉はぬであろうか。それとも余は遂に彼等に再会して彼等の苦勞を慰め、彼等の赤誠に答ふる機会は永久に無いのであらうか。

大正三年八月二十日手記  
鎌之介の手記蝸堂隨筆の一文

「黙然と聴くや椿の落つる音」

「風かほる方を返らぬ旅にして散るものと悟れば安し花に風」



杣



鎌之介